

一經論の名の下に一樣な文献処理をすることは許されない。個別的文献研究が望まれるゆえんである。

四

以上、唯識思想に関する、片野道雄氏および舟橋尚哉氏の新刊二書に対する所感を記した。時間も紙数もなく充分な書評をなしたとは思わないが、浅学菲才を顧みず、自分の考えたままを認めたつもりである。おおまかに両書の特徴や問題点を指摘するに急であつたため、細部については本書評で取上げるこゝとのできなかつた箇所も幾分あるが、それらについては、いづれ詳しく触れる機会があるうかとも思う。

なお、当然のことながら、両氏には、これらの著書がなる以前に、数篇の論文がある。特に舟橋氏の著書は、自ら断っているようにそれら過去の論文の集大成的な面が強い。従つて、本書評で指摘したような本文や註にみられる重複も、半ばそれに起因するものと思われるが、一著書として公けにされた以上はこれが著者の最新の成果とみなして評価したことをお断りしておきたい。

(昭和五十一年七月十五日)

赤尾龍治編

『盤珪禪師全集』

鏡島元隆

道元禪師、白隱禪師と並ぶ日本三大禪思想家の一人である盤珪禪師(一六二二—一六九三)の全資料を集大成した『盤珪禪師全集』が、このたび赤尾龍治氏によって編纂刊行された。

本書は、第一部法語集、第二部伝記逸話集、第三部詩歌及書翰集、第四部資料集、第五部資料解説の五部から成り、付録として盤珪の師および弟子の伝記、盤珪派寺院名簿、盤珪禪師遺跡案内記を載せている。文字通り、盤珪に関する全資料の集成である。

日本の禅宗史の上で、盤珪ほど市井の人人の中に入りこんで、平易な言葉で大衆に説法した人はない。にもかかわらず、盤珪は、その生涯において極力文字禅を排し、一冊の著書も遺さず、また記録類を書留めることを禁じたと伝えられる。それがために、歴大な説

法も、記録として遺されているものは、ただ元禄三年(一六九〇)の一年間、しかもその年の内の一部分のみに過ぎないと言われる。現存する盤珪法語は、盤珪の示寂後、側近の弟子達や因縁の深かつた人人が止むに止まれぬ敬慕の念から、その説法や逸事伝記を記録したものが、わずかに遺されているだけである。従つて、盤珪の面目の全容を窺うには、盤珪の遺された法語逸事のすべてを集めなければならぬのであつて、それには全国に散在する盤珪有縁の地に広く断簡零墨を求め、入手困難な資料に当るほかない。このことは、言うべくして行い難い困難な仕事であるが、この困難な仕事に身を挺し、美事に一書にまとめたのが本書の著者赤尾氏である。盤珪に対する並並ならぬ敬慕と傾倒がなくて、は、とうてい出来ることではない。しかも、

氏は中年にして学に志した晩学の人である。その人にしてこの大著を成し遂げたとは、驚きのほかない。

著者赤尾氏は、盤珪と生誕地を同じくする姫路市網干の出身である。旧家の長男に生まれたが、早く両親に死別し、中学（旧制）を出てから進学を断念し、家業の木材業に専念した。兄弟七人の親替わりとして、弟四人を大学に出し、その間、家業のかたわら、姫路市議や、小・中育友会会長、青年団長などを歴任し、社会的地位もようやく定まったかに見えた。普通なら、功成り名とげて余生を楽しむ生活を設計したであろうに、氏は青年時断念した向学の念を抑えることができないで、志を立てて本学に入学したのである。昭和三十九年、氏、四十七歳の年のことである。

もともと、赤尾氏の生家は浄土真宗の門徒であるが、氏は本学に入学したのが縁となつて次第に禅に傾斜し、とくに郷土の偉人盤珪に心をひかれ、仏教学部を卒えて、大学院の修士課程、博士課程を修めるにおよんで、盤珪研究に没頭するにいたつた。およそ、盤珪の遺跡にして氏の足跡の至らないところはなく、盤珪の研究にして氏の眼に触れないもの

はないであろう。かくして、氏は長崎県平戸市の雄香寺、愛媛県大洲市の如法寺、東京港区麻布の光林寺など、全国の盤珪ゆかりの約百ヶ所を歩き、二百編にものぼる資料を集めたのである。古田紹欽博士がこの書の序文で記しているように、この書は文字通り足でまとめた書と言えよう。

近來の盤珪研究書としては、

鈴木大拙 盤珪の不生禪 弘文堂（昭和一四、三）

鈴木大拙 盤珪禪師語録 岩波文庫（昭和一九、九）

鈴木大拙 盤珪禪の研究 山喜房（昭和一七、一一）

鈴木大拙 盤珪禪師説法 大東出版社（昭和一八、三）

鈴木大拙 禅思想史研究第一―盤珪禅 岩波書店（昭和一八、七）

等があり、その他、研究論文も数多くあるが、赤尾氏のこの書ほど、広く全資料にわたつて書誌的検討を加え、内容的精査を施したものはない。盤珪は臨済宗の人であるが、その宗風は道元禅に近いものがあるとも言われ、洞門の天桂伝尊などに深い影響を与えた

人である。従前の研究が、ほとんど臨済系の人によって占められ、宗門の人によるものが見られないことは寂しいことである。いまや、赤尾氏によって盤珪に関するこのような確実な資料が提供されたのである。新進の士の研究を切に望むものである。（本文九四五頁、付盤珪法脈図、大蔵出版社、昭和五一・一月刊、一五、〇〇〇円）